

---

# 七夕おりん～新米同心3人衆の受難～

かれいど すこーぶ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

七夕おりん／新米同心三人衆の受難／

### 【Zコード】

Z3888M

### 【作者名】

かれいど すこーふ

### 【あらすじ】

同心清島安次郎は、ある夜向かいの店に監禁されていたお針子の命を助ける。

しかし、そのためこつそり忍び込んだことが元となり、その店の一人娘との婿入り話が持ち上がる。何とか婿入り話を破談にしようと友人の佐倉一真と、大堀兵庫に相談するうちにある事件と絡んでいふことに気付く。

新米同心三人衆の二本目です。どうぞよろしくお願いします。

## 序幕 其の一

あれが天の川  
あれが牽牛星  
あれが織女星  
ふたりは年に一回この大きな川をわたつて  
年に一回逢瀬を遂げる

けれど下界じゃ  
年中一緒に  
同じところにすんでるのに  
どうしようもなく好きなのに  
手さえもふれられない男女がいる

あこやまはあの夜、そうおっしゃつた

りん  
おりんよ  
あこやまが犯した罪はお前のせいだ  
この血染めの刀も  
この血染めの着物も  
全部お前が悪いのだ

あに様の断末魔が聞こえるか  
最期まで  
最期までもおのよつて  
ほづれ  
お前の名前を呼んでこる

血染めの兄の罪を継ぐのだ

それが残されたお前の償いだ

## 序幕 其の一

夜も更けておりんは窓を開けた。

風がおりんの降ろしたままの黒髪をふわりと広げた。

時は既に夜九ツを廻り、見下ろす日本橋界隈を歩いているものは誰もいない。

空を見上げる。円の出でいない空は満天の星だった。

もう三月もすればまたあの命日がやってくる。

おりんはそつと天の川に手を合わせた後、星明りを頼りに窓から身を乗り出すよつこして裁縫を始めた。

「この栄屋に引き取られてもう9年になる。

ほとんど部屋から出されることもなく毎日縫い物だけを朝晩なくやらされてこる。

17歳とこゝ年頃の女には誠にひどいことではあつたが、仕方のないこととおりんは思つていた。

目の前の3間程の路地を挟んで、円満屋といつ呉服屋がある。

同業とはいえ、栄屋とは比べ物にならないくらい規模が大きい。

長女が武家に嫁ぎその孫は町奉行所に勤めていた。

安次郎といつその侍がよく出入りをしてくる。

しばらくして、円満屋側の屋根裏の窓が開いた。

星明りでぼんやり顔がみえたときそこにいるのが当の安次郎であることに気づいた。

安次郎は煙草をふかりとふかす。

伊達男の代表格。日本橋ではそう呼ばれるほど、安次郎は粋で若い

女に人気がある。

安次郎はおりんに気付いたらしく顔を向けた。  
おりんは恥ずかしくなり目を伏せる。

そつと田をあげると、安次郎はまだおりんを見ていた。  
おりんに向かって手を振っているのがわかつた。

おりんは小さく手を振り替えした。

暗くて相手の顔はよく見えないが、安次郎はそれで満足したようだ。

煙草をまたふかりとくゆらせ始めた。

おりんも裁縫を続ける。

そのとき手からはさみが滑り落ちた。  
はさみは急斜になつている庇を滑り落ち、瓦に引つかかってしまった。

た。

「どうなくせや

おりんは窓からそつと外に出た。

黒い睡髪が風に巻き上げられ、首に巻きつぶつた鉄輪をあらわにする。

その先に繋がれている鎖がじゅりり、と重い音をたてた。

## 第一幕 清島安次郎の受難 其の一

清島安次郎は、友人の佐倉一真の家で傘張りをしていた。既に傘は部屋一面を覆つほどできあがっている。

「何で、俺の家で」

一真はボソリとつぶやいた。

「だつて、兵庫さんのお家は少しさめだからたくさん作れないじゃない。一真さんのうちだとお部屋もあまつてるんだし、どうせ非番で暇なんでしょう」

休憩用の冷茶をもつてきた沙代が一真に答えた。

端正な顔立ちの一真と、愛くるしい沙代は一つ違ひの従兄妹同士で兄妹のよつな付き合いがある。

「助かつたよ、沙代ちゃん。一真つたら俺の頼みは聞いてくれないくせに沙代ちゃんの頼みはきくんだもんなあ」

傍で糊を混ぜていた狸顔の男が言った。大堀兵庫である。

この内職は、この兵庫の持つてきたものだ。

兵庫は、八丁堀の家を売り町人たちの住む長屋で暮らしている。簡単な話が貧乏なのだ。生計を立てるため俸禄で足りない分を内職で補つている。

3人は町奉行所勤めの悪友だった。

「兵庫さんは偉いわ。一人でお家を切り盛りしていらっしゃるんでしょ。少しくらい私もお手伝いさせてくださいよ」  
もじもじとそういうながら沙代は頬を赤らめた。

可愛いのに、兵庫なぞが好きだなんてもつたいたいな、と安次郎は思つのであつた。

冷茶を飲みながら小休止をしていると、来客の声がした。  
沙代が玄関先を見に行くと、そこには可愛らしい少女のよつたな顔をした袴姿の子供が立つていた。

「ここに清島安次郎と申す男がきてはおりませぬか」  
礼儀正しく挨拶したその子は男の子であつた。

「かわいい」  
思わず沙代が頭を撫でる。

すると、子供は顔を真つ赤にしてぶつつと膨れた。  
「武士に向かつて可愛いは失礼であろう」

「おちやじやないか」

様子を伺いにでた安次郎が言った。

子供は知三郎といい10歳になる安次郎の弟であつた。

「おちやじやないな、知三郎じや。お前に忠告にきた。今日は家に帰らないほうがいい。家の中は大嵐だぞ」  
女の子扱いされることが嫌らしく可愛い顔で兄を睨んだ。

「何がお前だ、偉そに。俺が何かしたか」  
安次郎は小生意気な知三郎の頭を小突いた。

「不埒者の兄だとは思つてはいたが、これほどまでは思わなかつた。父上も母上も立腹だ。じいさまもため息をついていたぞ」  
思いつきり兄を睨む。

「だから、なんだつていうんだよ」

へらへらと笑いながら安次郎は茶を飲む。

「その、なんだ。そんなふしだらな・・・」

知三郎は真っ赤になりながら口づもつた。

やがてあつぱりと顔を上げて兄の悪行を言い切つた。

「お前、孕ませただろつー！」

安次郎は飲んでいた茶をぶつと吐き出し、それは向いに座っていた一真にもろにかかつた。

驚きのあまり一の句が告げない。

「栄屋の旦那と娘のお園さんが昨日円満屋のじこをまのところに来たんだ。それで、お園さんが妊娠している、相手はそひらの血縁の安次郎様だといつたそうだ。見損なつたぞ、商売敵の娘を手籠めにするなんて」

知三郎はそつこつて兄をまた睨む。

「ど」まで見境ないんだ、お前は  
一真が顔を拭きながら言った。

「すげーな、妊娠かあ。色男は違うなあ」  
兵庫も感心している。

沙代は軽蔑するよつたな顔で安次郎を見た。

安次郎は真っ青になり慌てて弁解する。

「違う。違うつて。俺はそんな失敗しないし、第一栄屋の女なんて

手を出すはずがないだろ・・・、あつ  
突然、安次郎は思い出したように声を上げた。

「手、出したといつか」

## 清島安次郎の受難 其の一

3ヶ月前の話である。

安次郎は祖父と一緒に日本橋人形町にある茶屋で遊んだ後、夜も更けたのでその日は円満屋に泊まった。

円満屋の2階の上には屋根裏部屋があり、安次郎はそこを煙草をふかしたり、付文を読んだりするくつろぎの場にしていた。  
その夜もそこで煙草をくゆらかうと窓を開けた。

すると向かいの栄屋で垂髪の女が薄暗い星明りの下、縫い物をしていた。

「可哀想に、こんな時間まで働かされて」

安次郎は女に手を振った。

始めは無視していた彼女もやがて手を振り替えしてくれた。

安次郎はそれに満足してまた煙草を吸い始める。

そのうちに、女が何か落とした気配に気付いた。

窓から外に出てそれを拾いに向かっている姿が見える。  
かなり足元がおぼつかない。

「危ないな」

安次郎も心配そうにその様子を見る。

そのとき、彼女の降ろした髪の中からいびつな光を放つ線が部屋の中から伸びているのに気付く。  
目を凝らし、思わずぎょっとした。

鎖が首に繋がれている。

「足滑らせたら死んじまつ」

安次郎は部屋から飛び出し、女のいる庇へ向かつた。

安次郎が塀を乗り越え、屋根づたいに女のところにたどり着いたとき、ついに女は足を滑らせた。

屋根にしがみつきもがく女を安次郎は抱え上げ、そのまま部屋の窓まで連れて行つた。

驚くほど体の軽い女だった。

「大丈夫か、あんた」

窓の縁に座り安次郎は女の無事を聞いた。

女は黙つてうなずく。

「なんだって、こんな鎖なんか・・・」

鎖をジヤラジヤラならした。

女は首を振つた。

「いいの、気にしないから」

「気にするとかの問題か？夜中まで仕事をせたり、首に鎖なんて。

俺が組合に文句言つてやる」

安次郎が苦々しげにつぶやいた。

女はそれを聞くなり血相をかえ「だめっ」と安次郎に向き直る。

黒い瞳に長いまつげ、唇はやべりんぼのよつて艶がある。

美しい娘であった。

「お願いだから、ほつておいて。私はこのままでいいの」  
うつむいたその田には夜露のよつた涙が光っていた。  
その可憐で儂い様子は幻のように思えた。  
夜空に吸い込まれ消えてしまいそうだった。

安次郎は思わず抱き寄せた。

そのまま女に顔を寄せるとその脣に、脣を重ねた。

「接吻したあ？」

兵庫がすっとんきょうな声を上げた。

「安次郎さんつて、ほんの数回言葉を交わしただけの相手とも接吻

できるんですね」

沙代が軽蔑に侮蔑をこめた声で言つた。

「いや、ついうつかりというか。幻かどうかわからなくなつてさ。  
まだ酒も残つてて」

安次郎が冷や汗をかきながら言ひて訳をする。

「本当に接吻までなのか」

一真が冷茶を飲みながら尋ねる。

「一真まで・・・

安次郎は途方にくれた顔になつた。

「やつぱり覚えがあつたか、見損なつたぞ。栄屋はお園さんとお前  
を夫婦にして栄屋を継がせるつもりだ。吾は清島の家を継ぐ覚悟は  
いつでもできておる。お前は一日頭を冷やして婿養子に行く覚悟を

つけるんだぞ」

知三郎はふんぞり返つて言った。

「おひしゃ、てめえ。後で泣かしてやるからな」

きつぎりと青筋を立ててそういう残すと安次郎は家へと駆け出した。

## 清島安次郎の受難 其の三

はたして家は大騒ぎであった。

母の清重は安次郎を見るなり、背中をぽかぽかと叩いた。

「いの馬鹿息子ー。よりによつてお松の娘とだなんて。あんな性悪のところに婿養子に出さなきやいけないなんて、あんたなんか産まさきやよかつた」

そういつて夫の胸に飛び込むと、おいおいと泣く。

清重は、もとは町娘なので氣を抜くと遠慮のない蓮つ葉な口調になる。

父は母を抱きとめ、落ち着きなさいとたしなめた。

「私は、お園さんとは会つたこともありません」

母に向かつて弁解するよつと言つた。

「つそつー。だつて栄屋の丁稚があんたが忍び込んでくるのを見たつていつているわ。屋根を伝つてぴょんぴょんつと

清重は手振りを沿えて話す。

安次郎は見られていたことに内心苦い顔をした。

「忍び込んだのは確かなのだな」

それまで黙つていた父朔太郎が問う。

「はい。しかし、それは人の命を救うためで決して不埒なことを行うものではありません。栄屋には首を繫がれ、夜中まで労働させられている女がいたのです」

安次郎はその夜の事をかいつまんで父に説明した。

安次郎の父もまた奉行所勤めであり物の道理はわかっている。少し考え込んでから安次郎に言った。

「栄屋は、跡継ぎが辻斬りにあつてからといつもの評判がよろしくない。特に後妻に入ったお松は奉公人を奴隸のように扱うらしいな。お前のいっていることもまんざら嘘ではないかも知れない」

しかし、とつけくわえる。

「お前はそういうところがだらしない面がある。宗兵衛殿と一緒に栄屋に行つて事情を話しなさい。やましいことがないのなら本人たちの目の前でも訳を話せるよな」

安次郎は罰が悪せうにうなずいた。

その後すぐに安次郎は祖父の円満屋宗兵衛とともに栄屋を訪れた。

祖父の店である円満屋は6代続いている老舗の呉服問屋だ。規模でこそ大丸や越後屋には劣るもの、その売り上げや顧客力は界隈では一、二を争う。

売り上げの面で他の店に遅れをとつてはいる栄屋にとつては大きな商売敵と手を組むことは願つてもなことだらう。

「お前が婿にいくことになつたら、少し密を回さないといけないだらうな」

少々太つたその体を揺らしながら苦笑交じりにさうつぶやいて、栄屋の暖簾をくぐつた。

「まあ、安次郎様。お久しぶりです」

店先で安次郎達を出迎えたのは当のお園であった。

色は白いが、顔立ちはきつく勝気な様子が伺える。

「お前に会つたことはないとと思つが」

安次郎が冷たく言い放つた。

もつとも、この男は女に甘い。

本人が冷たいつもりでも聞いてるほうはそんなこと微塵も感じない。

「やだ、しらばつくれないで」

鼻にかかる甘い声でそういうと安次郎の手を取り奥の間へいざなつた。

「おつ父さん。清島様と、円満屋様がいらっしゃいましたよ」

弾んだ声でお園は父に呼びかけた。

部屋には栄屋の主人、栄屋太郎衛門が座つていた。  
にこにこと商売人らしい笑みを向けているが、どこか霸氣がないのは娘の妊娠騒動に振り回されているからだろうか。

安次郎は一度咳払いをして気合を入れると、栄屋に忍び込んだらましを説明した。

とくに垂髪の女については栄屋の奉公人の扱いも疑うようなひどい扱いだと付け加える。

しかし、栄屋は首をかしげた。

「不思議なことをいいなさる。今我が家にいるのは五人の奉公人です。その五人とも垂髪でもないし、ましてや監禁しているだなんて」  
「安次郎様は勘違いなさつてるわ。私が風邪で寝込んでた頃の話ですもの。その時に私が髪を降ろしていったからでしょう。」  
お園はそういうて笑つた。

安次郎は祖父をちらりと見た。

宗兵衛も曇った顔で安次郎を見ている。

どうやら安次郎の勘違いを疑っているようだ。

このままでは夜這いをしたことになってしまつ。

安次郎に嫌な汗が流れた。

そのときタン、と襖を開けてお松が入つてきた。

「途中から口を挟んでしまつて申し訳ないですけれど、なんならお調べいたしませんか。うちに隠しごとなど全くありませんし、何せ清島様はうちの婿になるお方ですもの。気の済むままにお家を案内いたしましょう」

お松はお園よりも勝気な顔をして微笑んだ。

その微笑の下に射抜くよつた鋭い光を見た気がした。

## 第一幕 栄屋の秘密 其の一

安次郎はとぼとぼと八丁堀を歩いていた。

結局、縁談は破談にならずにそのまま進んでしまった。

このまま家に帰るのは嫌だつた。

母から夜這い魔呼ばわりされるのはもちろん、知三郎が当主と偉そうにするのも耐えられそうにない。

仕方なく一真の家に向かつた。

「あら、夜這い魔が来たわ」

一真の家で夕飯を作つていた沙代が言つた。

「夜這い魔はやめてよ」

安次郎はため息をついた。

「一のままじや俺、婿養子だ」

一真の据わつて いる茶の間に上がりこんだ。

「垂髪の君はいなかつたのか」

一真が言つた。

「何だそれ？」

「源氏物語みたいで素敵でしょ。それとも接吻の君のほうがいいか

しら」

茶を運んできた沙代が口を挟んだ。

「なんでもいいよ、とにかくあの娘は隠されていた」

安次郎はお松に促された事を渡に舟とばかりに家中を探し回った。ようやく件の部屋へたどり着いたのだが、そこはガランとした物置だった。

誰かが使っているような様子もない。

「そんな・・・」

幽靈でも見たのでしょうか、と付き添っていたお松は笑いながら言った。

安次郎は窓を開けた。向かいに円満屋が見えた。

酒の勢いも借りた夢だったのだろうか。

そう思つてふと下を見下ろしたとき、はさみが庇に引っかかっているのを見つけた。

同時に、窓枠の鎖が擦れた後にも氣付いた。

彼女はいる。

この家のどこかに隠されている。

「でも鎖の跡だけじゃどうしようもない。結局それだけだった」  
安次郎がため息をついた。

「栄屋のことだけどな」

不意に一真が話し始めた。

「あそこの息子、七太郎のことだ。十年前に辻斬りにあつてている。下手人は木山小次郎、一刀流の使い手だ。七太郎以外にも三人斬っている。その後捕まつて小次郎は磔。その両親は責任を感じて自害した。妹もいたがこれは生きている。街道沿いの農家に引き取られ

たらしい

「調べてくれたのか」

安次郎はまじまじと一真を見た。

「お前が婿に行つたらつまらなくなるからな。兵庫は今、務めにいつているが岡つ引き達に栄屋の事を聞いてもらつて。それより、気になることがあるんだ」

一真は、刀を振るような仕草をした。

「一人目から三人目は、背中なり胸なり一気に切つて。これはためらわずに一気に斬り込んで。實に剣の使い手らしいやり口だ。でもな、最後の七太郎についてはちょっと違うんだ。心の臓をさしている。それまでのやり方とは違うんだ」

「一刀流だつて突きくらいあるだろ」

「そうじやない。刀を持つていらない町人なんて斬る方にしてみれば腹出して寝ている猫みたいなものだ。刺すなんて地味で逃げられそうなことするよりも思う存分斬りつければいい。それに刺したものも背中までは貫通していない。短いものだな。懷刀みたいな」

「辻斬り、じゃない」

安次郎がぐくりと喉を鳴らした。

一真はうなずいた。

「帳面上、これが辻斬りになつてているのは、木山自身が白状したからだ。けれど、木山は随分いいかげんなことを言つていたという記録も残つてゐる。この証言も疑わしいものだな」

そこへ公務を終えた兵庫が戻ってきた。

「安次郎、来てたのか。丁度いいや、岡つ引きの銀さんが、栄屋の若旦那のことを覚えていたんだ。何でも殺されたのは二十歳だったつて。栄屋はやりきれないだらうなあ」

そういうつて安次郎の横に座ると、仕入れた情報を話し始めた。

十年前の栄屋は、主人と前妻のお旦、それに跡継ぎの七太郎の家族三人と奉公人數人で切り盛りをしていた。

小さいながらも家族仲も良く伸び代のある店でそれなりの繁盛をしていた。

ただ一点の曇りといえば、太郎衛門がよそに妾を囲っていたことである。

それがお松、間に生まれたお園はその時六歳であった。

夫婦はこのことになるといつも喧嘩になつた。  
そして、あの事件が起きた。

その日、お松に金を工面してやつていた太郎衛門はそのことがお旦に見つかりそうになりやむを得ず七太郎に持つていくように頼んだ。腹違いとはいえお園を可愛がっていた七太郎は快くそれを引き受けたのだが、その帰り道で辻斬りにあつたのだ。

夫妻の悲しみは大きかつた。

ことにお旦はひどかつた。

半狂乱になり夫を責め、お松を責め、自分を責めた。

拳句に四十九日を待たずして首をつったのだ。

太郎衛門は人が変つたように暗くなつた。

毎日呆けたように部屋に閉じこもり、商いをすることもなくなつた。

栄屋は終わりだ、と誰もが思つた。

しかし、そこにお松が現れた。

傾きかけた店をてきぱきと建て直し、呆けた太郎衛門の世話を甲斐甲斐しく焼く。

心配していた親戚や奉公人はほつと胸をなでおろした。

そして、皆に望まれてお松はお園を連れて後妻へと入つたのだ。

「へえ、あの太郎衛門がねえ」

あの笑顔の裏に壮絶な過去があつたものだ、安次郎は太郎衛門の二コ二コと笑つてゐる顔を思い出していた。

「でもね、それからがひどいんだ。妻の座を手に入れた瞬間から手の平を返したように、奉公人につらく当たる。朝晩なく働かされて、飯も少ない。次々に辞めていつて当時から残つてゐる人は誰もいな。新しく入つても、半年も待たずにして行くんだつて」

「奉公人をいびるのは感心しないな。安も婿にいつたらいびられるかも」

からかうように一真が安次郎を見た。

「よせよ。でも、その噂どおりならあの娘の鎖も労働も合点がいく。きっと、今もひどい目にあつてるんだろうな」

同情をするように安次郎がつぶやいた。

「お前がそんなに入れ込むなんてな。美人なのか」

一真が少し興味深げに尋ねる。

「美人だ。お園なんかよりもずつとな。おまけに大人しいし可憐だ」

力説する安次郎に兵庫がふつと吹き出した。

「それだけ記憶がしつかりしてゐなら、見間違えでもなさそつだな。

明日は非番だから俺、栄屋を見張つとくよ。もしかしたら何か手掛け  
かりがあるかもしれないし」

## 栄屋の秘密 其の一

翌日、兵庫は店の裏の路地に立っていた。

表はにぎやかで繁盛しているが、裏に回れば通夜のように静かだつた。

時折、塀の向こうから厳しい命令や激しい叱責が聞こえてくる。

「こりゃあ、逃げ出したくなるわけだ」

兵庫がそう思つほど暴力的な口調だった。

なおも兵庫が苦い顔をして腕を組んでいると、裏口から若い女が泣きながら木戸を開けた。

小さな荷物を背中に背負い小走りに店を出て行く。

兵庫はその尋常じゃない泣き方に思わず声をかけた。

「もし。 いかがなされた」

兵庫の人懐っこい狸顔が、女に優しく響いたようだ。

「今しがた、奉公先を首になつたのです」

女はぽろぽろ涙をこぼしながらそういった。

兵庫は茶屋の縁台に腰掛けて、おたみとこうお針子に団子を奢つてやつた。

「何で首になつたのや」

「お園さんが、自分の着物のほころびをお密さんの縫い物より優先

しろつて聞かなくつて。

だけどそれを断つたら怒つてしまつてお松さんに告げ口されて首。ひどいしょ。でも、首にならなくともあんな店もつ耐えられないけど」

鼻水をすすりながらおたみは言つた。

「お針はおたみさんだけなのかい？」

兵庫は聞いた。

「私と通いのおばあさんが一人いるわ。それだけよ」おたみは、団子をほおばり答えた。

「その、首を繋がれた垂髪のお針などはない？」

思い切つて聞いてみた。

「何それ、お化け？」

おたみは怪訝な顔で一蹴した。

「私たちだけじゃ受けきれない分は、旦那様がやつてくれるわ。さすがに長く黒服屋をやつてているだけあって早いしそれは上手なの」

でもねえ、と付け加えた。

「あのお松とお園はそことのところは点でだめね。人を使つこと、金を稼ぐことは旦那様以上だけど。特にお園。安次郎様に見初められたなんて絶対嘘。あんな性悪が安次郎様にほれられるはずがないわ」茶で酔つたのかと思つべからい、おたみは憎まれ口を叩いた。

「それにお園は妊娠なんてしていない。でっち上げてるの。月のものだつてちゃんと來てるのよ。私、知ってるんだから」

そういうたとこでおたみは、自分が人知れず恥ずかしい話をしていることに気付いてハツと顔を赤らめた。

そんな様子を兵庫は笑顔でうんうんと相槌をつつ。

しかし内心は思わぬ情報に、えええーっと驚いていた。

「上野の笹屋でまつ」

安次郎からその知らせを受けてお園は浮き足立っていた。  
笹屋は上野に多くある水茶屋の一つだ。  
恋人たちはここで逢瀬をする。

お園は待ち合わせよりもずっと早く笹屋の部屋で待っていた。  
自分の犯した悪戯がばれていることなど露程も知らずにただ浮かれ  
ていた。

田の当たりの悪く薄暗い茶屋の小さな一室で安次郎を待っていると、  
すっと後のふすまが開いた。

「安次郎様」

満面の笑みと期待をもって振り返った。  
しかしお園の目に映つたのは安次郎だけではなかつた。

「お手柔らかに頼む、な」

苦笑しながら、後ろにいた一真に手を合わせた。

その安次郎を後ろに押しやると一真がお園に迫つた。

「よくも俺の友人をだましたな。貴様、自分の立場をわきまえずに  
でつち上げをして武士の身分を辱めてくれた。無礼打ちにしてもい  
いくらいだ」

そういうて一真が鯉口を切つた。

「ひつ」お園が短く悲鳴をあげた。

「お前の妊娠を嘘だと証言しているものがいるんだ。なおも妊娠してこると言い張れるのであれば、今すぐ腹を裁いて確認してもいいぞ」

刀をすっと抜く。

その目には情も容赦もない殺意のみが浮かんでいた。

お園は全身を振るわせた。

「い、『めんなさい』」

喘ぐようにお園は言った。

「『めんなさい。全部嘘なんです。だって、おりんがいけないのよ。』使用者の分際で安次郎様に手を出すから」

安次郎が傍によつてお園に問いかけた。

「あの娘はおりんつていうのか。どういう娘なんだ。何故隠している」

お園は首を振った。

「わからない。でも9年前におつ母さんが連れてきたの。きっと、おつ父さんが自分の縫い物を全部おりんにさせていることが分かつたら面目が立たないから隠してるんだわ。私はそのおりんが隠れて安次郎様と逢瀬をしているのが許せなかつたの」

そういうつてお園は泣き出した。

3ヶ月前、お園は物音に目を覚ました。  
すぐ上のおりんの部屋から声がする。  
いぶかしんで庭に廻つておりんの部屋を見上げてみたら、円満屋の  
安次郎と一人で接吻をかわしていた。

星空を背にした二人の姿は一瞬見とれるくらい美しい図であった。思わず部屋に駆け込み安次郎の気配が消えるまで息を殺していた。

しかし、後から湧いた感情はおりんに対する激しい嫉妬であった。

お園はおりんの部屋にかけこんだ。

「今夜のことは忘れなさい。安次郎様が逢瀬に来たのはお前ではない。私なの。田陰の身で男をたらしこんでるなんて知れたらあんただって唯じやすまないわ。これはあんたにとつてもいい話でしょ。だから、今日、安次郎様と逢瀬をしたのは私。あんたはそれを見ていただけ」

おりんは、なにもいわずただ首をたてに振った。

次の日早速お松におりんの部屋の下にいることが不満だと文句をつけ、おりんを隠す部屋を変えてもらつた。

これで安次郎ともう会つことはないだろつと、お園はそう考えた。そしてそれだけに飽き足らず今回の妊娠騒動を起こしたのだ。

丁稚が、安次郎が塀を越える様子を見ていたこともあってこのまかうまく進んだ。

「そこまでして俺と一緒にになりたかったのかよ。腹も大きくならなきやいけないんだし、いづれは分かることだ。どうかしたら町方やってる清島の家も円満屋も敵に回してしまつんだぞ」

安次郎はあきれた。

「祝言をえすんてしまえばいいのものだと思つてました。子供は結局だめだったと言おつと思つてました」

泣きじやくりながら、「めんなさいと繰り返すお園を安次郎は少し

かわいそうだと思った。

水茶屋を出て安次郎は「刀を抜くのはやりすぎだ」と一真に言った。

「お前は女に甘すぎる。あれもこれもと、女を欲張るからそうなるんだ」

「欲張つてなんてないさ。でも、女に泣かれるのはどうも弱い」  
安次郎が頭をかいた。

そんな安次郎の背中とバンと叩いた。

「しつかりしろよ。これからおりんという娘を洗うぞ。ひょっとしたら捕り物になるかもしれない」

「捕り物だつて?」安次郎は驚いて聞きなおす。

「まず女衒を当たるぞ。じつせまともな口入屋に言つてもおりんな  
んて名前は出てこないだろ?」

いぶかしむ安次郎を見て一真は涼しい顔で言つ。

「女衒の美人を見出す目はすごいからな。美人なんだろ、その娘」

## 第三幕 捕り物 其の一

栄屋の暖簾を三人の同心が十手を携えてぐぐつたのは夕暮れ六ツである。

「ど、どうなさいましたか」

店を閉める準備を始めていた太郎衛門はその物々しい姿に驚いた。その声を無視し、先頭に立っていた安次郎がすかずかと上がりこむ。

「おりん、どこだ！」

太郎衛門が後を追いすがろうとしたのを一真が止めた。

「真、奉行所のほうから与力も着く。おりんがこちらにいることはわかつていてるんだ。大事な証言者だから」おひらにお引き渡しいただこう

「ですから、おりんなんてつちにはいませんよ」

太郎衛門を上目づかいに見ながら兵庫が言った。

「九年前に女衙屋から子供を一人買つただる。奴さん言つていたよ、花魁になれるくらいの上玉だつたのに呉服屋なんぞに売つちました、つてね。どうだい、弁解できるかい？」

太郎衛門の顔はさあつと青ざめた。

「あ・・・」

「何ですか、この騒ぎは  
奥からお松とお園も出てきた。

お園は先日の証言からこの捕り物になつたことを悟り、倒れそうなくらい真つ青になつていた。

「いぐらお役人様でもこれはあんまりでしょ。勝手にすげすけと  
上がりこんで押込みみたいなことをして」

お松は甲高い声で叱責をした。

「探されるとまずい」とでもおありか。おりんといつ娘がいないと  
いつのであれば存分に探しても差し支えないでしょ。それともお  
内儀には別のやましいことでもおありなのか」

一真の言葉にお松はぎりぎりと歯軋りした。

そしてお松は家中に聞こえるような声で叫んだ。

「よござこましょ、存分にお調べなさいませ！けれど、おりんな  
んものはおりませんよ。呼びかけても誰も返事などいたしませぬ  
から」

影から見守っている奉公人たちがびっくりと怯えるのが見えた。  
この声で、この家の恐怖政治を行っているのだ。

一真は内心苦い顔をした。

お松のこの言葉でおりんは安次郎の声を無視するかもしれない。  
長く監禁が続けば、恐怖に支配された主従関係は逆に強くなるから  
だ。

一真は、十手をお松の首に当てた。

「これ以上、声をあげることは許せんぞ」

その眼力の強さに射すべくめられたかのようにお松は押し黙った。

一方、安次郎は十手を手に、部屋とこつ部屋を探し回っていた。

物置や納屋、地下にある納戸も探した。しかし古い鎖の後はいくつかあるもののいずれも空振りであった。

しかも、先ほどのお松の声が家中にとおっている。

その声に牽制されてか、これだけ呼びまわつてこるとこりのに声も上げてくれない。

「おりん」安次郎はもう一度叫ぶ。

安次郎は主人夫妻の寝所に入った。

「おりん、俺だ。安次郎だ。声を上げてくれ  
一声でいい、頼むから返事をしてくれ。」

安次郎は願つた。

そのとおり、じゅらつと鎧の音がした。

「おりん、おりんでござります」

か細い声が壁の中から聞こえてくる。

「おりんは、おりんでござります」

安次郎は、壁に耳を当てた。そして鏡台でふさがれてこる扉を見つけた。

「隠し部屋か

鏡台をすりして壁の扉をこじ開けた。

そこには小さな天窓から入る薄明かりに照らされた、あの垂髪のおりんが座っていた。

「おひやしどりです」

おりんは少し笑みを浮かべて言った。

安次郎は、おりんの手を取つていった。

「おりん。お願ひだ。あなたの証言が必要なんだ。十年前の栄屋の跡継ぎが死んだ日、その日のことを教えてくれ。じゃないと俺たちが罰せられる」

実は大見得きつて乗り込んだはいいが全くの無謀であつたのだ。

古い事件で証拠が少ない上に既に解決済みの事件である。

掘り起こして奉行所に無理を押して今回の捕り物の手配をしたのであつた。

「あんたを助けにきたはずなのにそれとは別の事件をみつけたんだ。もう一度、あの夜のことを証言してくれ」

頼む、と頭を下げた。

おりんはこれを聞いて真っ青になつた。

「だめっ。そんなことをしたら、栄屋がつぶれてしまう」

「義理立てするような店か、あんたを監禁してんだけ」

おりんは自分の両肩を抱えうつむいて押し黙つた。

恐怖しているようにも迷っているようにも見えた。

「約束する。俺が護つてやるから。あんたを解放したいんだ」

安次郎はおりんの顔を覗き込んだ。

まっすぐに見つめる視線におりんは、視線を逸らして身を硬くした。  
しかしあがて安次郎に向き直つた。

「わかりました。でも太郎衛門様はお咎めなさらないと約束ください」

おりんはそういう立ち上がった。

壁に打ち付けてある鎖が引き抜かれると、おりんは自らの足で主人たちのいる店先へと歩んだ。

## 捕り物 其の一

二人が店先にでたときには与力の中尾、吟味方同心の板倉が既に到着していた。

中尾はおりんを見ていぶかしんだ。

「なんだ、その女は？おい清島、詳しく説明しろ」

しかし板倉が「あ！」と声を上げた。

「十年前の、あの木山の妹か。いや、当時からきれいな娘であったがこんなところにいたとは」

板倉は吟味方の熟練だった。

当時、聴取を行つたおりんのことを思い出したようだつた。

「まさか被害を受けた栄屋で奉公していたのか。それにその首。その瘦せよう。栄屋お前、木山のことを根に持つて虐待をしていたのではないだろうな」

板倉は厳しく詰問した。

太郎衛門はぶるぶると震え出した。

その時おりんが前に出た。

「そのようなことはございません。これは私が望んだことです」

おりんは太郎衛門を見ながらそう答えた。

太郎衛門は目を見張つておりんを見る。

おりんは笑みを浮かべそれに答えると土間に立つてゐる中尾に言った。

「十年前の辻斬りについて申したい儀がござります。兄は辻斬り、それは間違いございません。けれど、兄は七太郎さんを切つてはおりません。兄はその夜、家にいたのです」

実は、十年前の聴取のとき一度だけそれを証言したのだ。この証言は本人の自白によつて結局取り上げられることはなかつたが記録には残つていた。

一真は、七太郎の辻斬りについて調べていたとき田代とくそれを拾つたのである。

おりんと木山小次郎はこの日、庭で星を見ていたのだ。満天の星の中、恐れられていた辻斬りの兄と肩を並べて、父母すら知らないことであつた。

「木山は少なくとも三人は斬つております。しかし証言には多少あいまいなところもあり、この七太郎の件についてはでつち上げた可能性もあります。そして、謀らずもそれにより助かつた人がいます。お内儀」

一真はお松を見た。

「あの日、お前は七太郎が金を届けてその帰りの道をこつそりつけた。そして人気のない、いかにも辻斬り向きな場所で声をかけた。忘れ物だとかいつたんだろうな。振り向きざまに懐刀で刺したんだ。そして何食わぬ顔で戻つてのうのうと過い」したんだろ違うか、と一真は言つた。

「何を根拠にそんなことが」  
お松は顔をゆがめた。

「欲の皮が突つ張ると怖いもんだ。人を刺した刀を質に入れるなん

て。きれいにふき取つたつもりだらうけど、後々鏑が出て売り物にならなかつたつて質屋が言つていたよ」

兵庫が質屋から借りた帳面を取り出した。

「古いものだがあんたの字だろ。この証文」

「そんな。おつ母さんが、七太郎兄さんを殺したつて言つてお園が青い顔でつぶやく。

「お園、お前も覚えていろんじやないか。お松があの夜外に出て行つたことを」

「そういわれて何かを思い出したよつにハツとし、お園は口元を押された。

そして、声を殺して泣き始めた。

「七太郎だけじゃない、おそらく自殺と処理されたお旦もお前がやつたんだろう」

太郎衛門がぎょっとした表情でお松を見た。

「首吊りだといつことになつてゐるが、その直前に一人が争つてゐる姿を目撃されてゐる。お旦はお前が七太郎殺しとわかつたんだろう。たとえ分かっていなくとも、お前の用事で七太郎は出掛けたんだから逆恨みだつてされたつておかしくない。勢い余つて首を絞めたんだ。それを工作して納屋で首をつつてゐるよつに見せかけた。違うか」

一真は続けた。

「実際、七太郎とお旦が死んで特をしたのはお前だけなんだ。おかげでお前とお園は表でのうと暮らしている」

一真の言葉にお松はハツと笑つた。

「何を根拠に、そんなこと。お旦を殺した証拠でもあるつて言つのかい」

苦々しげにお松が一真をにらんだ。

これはしかし、一真の勇み足であつた。

確たる証拠は何もなく聴取で吐かせることしか道はなかつた。

中尾が心配そうに一真を見た。

「証拠はあるのか」

そのとき、おりんが横から言葉を入れた。

「うやうやしいます」

皆が一斉におりんを見た。

「納屋にお松様のお名前があります。私が数年前に納屋に置かれていたときにそれを見かけました。おそらく死ぬ間際にお松様の目を逃れ書かれたのでしょう。簪のようなもので書いた引っかき傷でしたので、お旦様の形見の簪と照合させてみてはいかがでしょうか」おりんの証言に、お松は悲鳴のような罵声を浴びせた。

「なぜ、それをいわなかつたのか」

太郎衛門が叱責するように言つた。

「いえ、太郎衛門様はどうなされましたか？お松様を離縁して、お園さんも追い出して、そうして栄屋を一人寂しく切り盛りするおつもりでしたか」

おりんの目に涙が滲んだ。

太郎衛門の戸惑いは皆にも伝わるほどに大きかつた。

「わしはお松とはもう一緒にあれん。全て裁きに任せんよ」

太郎衛門はお松の罪を認め、自分の非も認めるよつて中尾の前に出了た。

「よし、大堀。納屋にいけ。簪と照合してこい。それから、板倉は罪状の確認に走れ。娘の監禁の容疑は栄屋本人にもある。この夫妻をひとつらえるのだ」

中尾が指示を出し、一真は縄を手に持つた。

「お待ちください。太郎衛門様へのお咎めはなにとぞ取り下げを」  
おりんは手をついた。

傍にいた安次郎が慌てておりんを起こそうとした。

「こいつはあんたを監禁していたんだぞ。義理立ての必要なんてあるもんか」

しかしおりんは首をふる。

「太郎衛門様は、それは兄を憎んでおいででした。私もここに来た初めの日は私怨で殴られもしました。けれど九年間ここに置いていただいて、仕事も食も与えられ私は十分満足なのです。それに、両親ともお縄になればお園さんはどうやって生きていけばいいのですか」

啜り泣きをしていたお園は顔を上げておりんを見た。

虐待をしていた娘に、それも冤罪のようなものなのにこれほどまでに尽くされるとは太郎衛門も思つても見なかつたようだ。

「おりん、悪かった。わしが間違つていたよ。九年、九年もの間だ。

文句も言わずにこの扱いに耐えて。わしは、自分が恥ずかしい」  
太郎衛門は体を丸めてさめざめと泣いた。

そうしておりんの気持ちも汲まれて栄屋はからうじて潰されると  
は免れた。

しかし、安次郎はおりんの太郎衛門を思つ気持ちに違和感を覚える  
のを感じた。

## 第四幕 結ばねざる者 其の一

「どうしてもこゝのか」

安次郎が寂しそうにそうこつた。  
おりんはうなずいた。

一真の家で仲間内でのじく質素なものだつたが、七夕の宴が催され  
ていた。

先日までの、おりんの労をねぎらひつもりで行われた席だつた。

安次郎とおりんは夜も更けてなおも盛り上がりでいる輪を抜けて二  
人で縁側に座つた。

そうして酒を酌み交わしていたときふいにおりんが切り出した。  
「鎌倉の尼寺に行くことに決めました。明朝、明け六ツに出発しま  
す」

安次郎は驚いて猪口を落としそうになつた。

「何で。栄屋はあんたに謝つてこれからは娘同様に扱つつといつて  
いるのに。それに円満屋だつてあんたの腕を欲しがつてゐる。いく  
ところなんてたくさんあるだろつ」

「いくところなんてないです。私は科人の妹ですから」  
そういつてうつむいた。

「栄屋をかばつて、さぞいい子とお思いでしよう。けれど、私は自  
分を護つていてるだけ」

父母が自害し、兄が磔になつた後のおりんの生活はひどいものだつた。

家は断絶し財産は没収された。

親戚は誰もおりんを引き取りたがらず、おりんは農家で奉公をすることになった。

しかしそうに罪人の妹といつことは知れ渡つた。

毎日のように石を投げられ、引き取り先にも嫌がらせが行く。拳句には意趣返しかと称して関係のない「コロツキからも斬りかかられたりもした。

「もうお前をおいておくことができねえ」  
一年を待たずに奉公先から追い出された。

路頭に迷つてゐるときに通りかかつた女衒屋に見初められ再び江戸に戻つたのだ。

「お前は美人だ。遊女の世界できつと大成することだらうよ」  
上機嫌で女衒は言つが、おりんは自分の名が知れ渡つてゐる江戸が怖かつた。

そんな折、女衒屋にその女を欲しいといつてくるものが現れたのだ。それが栄屋のお松である。

おそらくお松は、おりんの一度だけの証言を聞きつけて不安だつたのだろう。

遊郭に売られる倍の値段で栄屋に引き取られた。

太郎衛門はおりんを見るなり仇討ちでもするかのよつに殴り続けた。しかしたくさんあざはできたもののそれ以上の手打ちはなかつた。

その後奉行所に駆け込まれないよつとお松から首に鎖をつけられ、隠された針子として飼われ続けていたのだ。

ところがそれは、嫌がらせにあつていたおりんことつてはこれまでにない素晴らしい環境だったのだ。  
しつかり隠されているので馬鹿げた意趣返しの心配もないし、仕事さえすれば叩かれることもない。  
だからこそ栄屋がつぶれることは望まなかつた。

しかし安次郎たちが捕り物に入りお松の悪事の言い逃れができないことを悟ると、お松を切り捨てる方向に考えを変えたのだ。

お松に全て罪を被せて、自分がお園と太郎衛門を救うことと今後に向けて大きな貸しを作つたのだ。

44

「尼寺にこれからたくさん寄付をしてもらいます。私はそれだけの貸しを作つたのですから」  
寂しく笑つた。

「私、汚い女なんですよ

安次郎は星を見上げた。

「それだけじゃないだろ」  
「え？」

「あなたが文句も言わずに栄屋に奉公していた理由だよ」

おりんの顔色が青ざめた。

「10年前の七夕の日、木山小次郎の磔が行われた。記録によると

縛られた小次郎は、死ぬ間際まで女の名前を叫び続けたらしく

「やめて」

おりんが耳をふさいで背を向けた。

「やめて。兄のことは、もう忘れないの」

安次郎はおりんの肩に手をかけそばに寄せると静かに呟つた。

「忘れないから、今ついにんだろ。随分探してあんたんちに勤めていた女中から聞いたんだ。木山小次郎はおりんを愛していた。そうだろ？」

おりんの黒い瞳にうつりすりと涙が浮かぶ。

「話してくれよ。誰かに言えば少しさは楽になるから」

そう促され、やがておりんはぽつりぽつりと話し始めた。

「あに様は私のせいで人斬りになつたの。私が、あに様の気持ちに答えられなかつたから」

小普請組の木山家に深い溝が生まれたのは小次郎が十八歳、兼ねてから持ち上がりついていた縁談がほぼ決まりかけた頃だった。突然小次郎はこの縁談を取りやめたいと言い出したのだ。

両親は困惑した。

しかし、その理由を聞いてますます驚いた。

小次郎は妹の厘が好きだったのだ。それも、どうしようもないほどに。

そう告げられた厘の動搖は大きかった。当時七歳、非常識ともいえる兄のこの気持ちをどう扱つたらいいのかもわからない子どもであった。

そしてその日を境に家族はどこかよそしきくなつた。特に厘は兄を避けた。

そうして奇妙な空気が続いていたある晩、小次郎がついに崩れた。夜中、何かの気配に厘は目を覚ます。同時にふすまを開けて厘の元に小次郎が近づいてきた。その手には、抜き身の刀を携えている。恐怖で厘の体が凍りついた。暗くて顔は分からぬが兄の形相がいつもと違うといふのはおぼろげに分かる。

「厘、後生だからあに様を避けるのはよしてくれ。俺はどうかなり

そうだ

押し殺したその声に哀願が漂う。

そして次の瞬間、厘の手を掴んだ。

「いやあつ

厘は、手元にあつた枕を投げた。それにひるんだ隙に父母の寝ている部屋に駆け込んだ。

後の記憶はおぼろげだ。

母が兄をなじる。

父が刀を抜いた背中が見える。

兄は。

兄は、咆哮するとふすまを切り、柱をきりつけ、そのまま外に飛び出した。

明け方戻ってきた兄は、血を被つていた。

以来、兄は心を悪い、妄言を言うようになった。

それだけではなく夜中になると刀を持ってふらふらと出て行く。

帰つてくると必ずどこかに血がついていた。

家人の目にも、小次郎が人を切つてていることは明確だった。

「結局三人という扱いになつてはいますがもつと殺されているはずです。私たちはどうしようもなく見ていることしか敵いませんでした。けれど、あの日は違つたのです」

夜になつて出て行つたと思われていた小次郎は何を思つたのか引き返すと、庭の隅にある草むらに寝転がつた。

厘がその姿を見つける。

星がきれいな穏やかな夜だつた。

厘は小次郎に近づいた。不思議と怖い感じを受けなかつた。

小次郎は厘に気づくと声をかけた。

「見ろよ。天の川だ」

厘も草むらに寝転がつた。

「あれが牽牛だ」

星を指刺す兄は以前の優しい兄のままである。

「あれが、織女星」

厘は起き上がつた。

「あに様。夜に出掛けるのはおやめになつて  
今しか言つことはできないと思つた。

しかし、小次郎はそれに答えずに星の話を続けた。

「星の一人は年に一度七夕の日に川をわたつて逢瀬するんだ」

小次郎は星空を指でなぞつてつぶやいた。

「皮肉なものだ。年に一度しか会えない一人より俺は好きな奴と毎日いるというのに、手も触れられない」

小次郎は溢れ出した涙を腕で隠した。

「厘よ、お前にはさぞかし俺が滑稽で異常な奴に見えてることだらう。でも本当にどうしようもないんだ。お前が恋しい」

厘は胸が痛んだ。

「あに様の気持ちには厘はこたえられません。厘は、妹なの」

言いながら、嗚咽がこみ上げてきた。

妹というだけではなく、厘は恋なんていうものすら知らない子供である。

「分かってるや、一緒になるうつとしているんじゃない。ただ、いつものように俺の近くにいるだけでよかつたのに」

地面を叩いて小次郎が起き上がった。

「お前に拒まれたとき俺は全て失った。木山の家も、親ももつびつなつたつていい。俺はもう、以前のようには戻れない」

さうに小次郎は厘にこう言つた。

「俺がこんなになつたのはお前のせいだ。俺が人を切るのも、木山の家を潰すのも」

厘には十分すぎる呪いであった。

もし、あの夜厘が兄を拒まなかつたら兄は人殺しにならなかつた。何もかもが元のまま、皆普通に暮らせたのだ。

数日後、辻斬りに出た兄はそのまま捕らえられた。

「磔は、それは惨いものでした。私はそれも残された自分の使命だ

と思い見に行きました。でも、あに様は群衆の中から私を見つけ出して、厘、厘つて、絶命するまで・・・」

語尾は涙で声にならなかつた。

ふいに安次郎がおりんを抱きしめた。

「七太郎の件が冤罪だとわかつていても、兄がそれも自分の罪だといつたから受け入れたんだらう。あんた、兄から受け取つた重荷を背負いすぎなんだよ」

あやすように安次郎は背中をポンポンと叩いた。

「泣けよ。今まででつかい声で泣いたことすらないんだろ。すつきりするぞ」

十年分の思いが堰を切つたようにこぼれ出す。  
安次郎の胸のうちで喉がかれるまでおりんは泣いた。

「七夕は嫌い。あに様の声がする気がして  
まだ少しひぐするよつに、おりんが言つた。

「一人でいるとつらいだろ?」

「もう、一人には慣れました」

顔を上げて、はねぼつたくなつた田をこすつた。

「来年も、一緒に天の川を見よつ

そついつた安次郎の言葉に噴出した  
「私、これから尼寺にはいるといつて」

「でも一緒に見ることはできるだろ?」

おりんは首をかしげた。

「だからさ、場所は違つても天の川は江戸でも鎌倉でも一緒だろ。七夕の日、俺は四ツの時に天を見る。そしてあんたのこと思い出すよ。約束する。これから年取つても、子孫ができるも俺はずつとあんたを思い出す」

そう思えば怖くないだろ、と安次郎は笑つた。  
おりんはまた安次郎の胸に顔をしつづめた。

やがて、おりんを呼ぶ声が奥から聞こえてきた。

「おりん殿、板倉殿がきたぞ。」挨拶なさい」  
一真の父、時宗に呼ばれておりんは晴れ晴れとした声で返事を返した。

立ち上がり奥へ向かう途中、安次郎にありがとうと微笑みかけて去つていった。

「よお、色男」

おりんと入れ替わりに2人の悪友が縁側に腰掛けってきた。

「うちは野原の一軒家じゃないんだ。あまり女を泣かせるな。俺が近所から勘違いされるじゃないか」

一真はそういうながら安次郎に勺をした。

「折角、余韻に浸つっていたのに。邪魔するなよ  
安次郎は少し顔を赤らめながらじろりと睨んだ。

「おりんは明日鎌倉に出立するそうだ。尼寺にはいるらしい  
安次郎がそう教えると、兵庫がもつたいなさそうな顔をした。  
「まだ若いのに。おい安。何で引き止めないんだよ」

安次郎は返事をせずに酒をあおった。

「好きではなかつたのか」

一真が問うと、安次郎が露骨に嫌な顔をした。

「野暮だな。そういうことはきくものじゃない」

それでもなお不満げな顔の兵庫をみてふううとため息をついていった。

「あの娘は、嫌な思い出の江戸を離れて両親と兄を弔いたいんだろう。それを止められるはずもないじゃないか。それに、おりんは俺のこと、そんなに想つてはないだろうし」

「へえ、これまた意外といった顔で一人が安次郎を見た。

「最初の接吻のとき、怒りも喜びもしなかつたんだ。ただ困った顔をしていた。今だつてそうだ、恋する女というよりあれば妹だ。もしかしたら、俺を兄と重ねていたのかもしれないな。相手にその気がないんじゃ好きにはなれないよ。俺は、片思いは嫌なんだ」

安次郎は格好をつけてそう言つた。

「若造共、お手柄だつたな」

吟味方の板倉が三人のところにやつてきた。

慌てて向き直りうとする三人を制して自分も座り込んだ。

「栄屋は存続だが、お松はまだどうなるか決まっていない。何しろ古い事件だから時効も考慮されて時間がかかりそうだ。それよりお前たちの褒美の件だが」

褒美と聞いて三人は色めきたつた。

「過去の事件を二つも解決してその犯人を無傷で捕らえたことは褒章ものだ。しかし、だ。今回の無謀ともいえる押し込み捕り物をたつた三人で行つたことはいかがなものか、と中尾様がおつしやつていたぞ。よつて賞罰相殺で何もなし。まあ、そういうことだ」

直にそういうお達しがあるだろうと、無謀な若者たちを楽しそうに眺めて戻つていつた。

「俺、けつこう期待していたのにな」

兵庫がしょんぼり言つた。

「俺も存外に物入りだった。調べてもらつた日明し達にも結構な金を払つたし」

嫌味たらしく財布を見ながら一真も言つ。

「結局、得をしたのは安次郎だけか。縁談もなくなつて、可愛い女の子も救つて。今回は安次郎のために働いたようなものだよな」  
兵庫は横目で安次郎を見た。

「しょうがねえな。酒でも寿司でも奢つてやるよ。でもな、おれも今回のことじいさまでにしばらく小遣いもねだれないんだ。手加減しろよ」「よし

安次郎は苦笑した。

なおも縁側に据わつている安次郎に明るい女たちの笑い声が聞こえてきた。

飾り付けられた笹の下でおりんは素麺を食べ、大きな西瓜に歓声を上げる。

数ヶ月前には考えられなかつた光景だつた。  
さらりとゆれる黒髪のおりんは見違えるよつて明るく、星のよつて輝いていた。

安次郎は西瓜を食んだ。

指をつたつて落ちていく青臭い果汁はやがて庭の暗がりにポツリと落ちて消えた

終幕（後書き）

お世話をありがとうございました（^ - ^）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3888m/>

七夕おりん～新米同心3人衆の受難～

2010年10月9日20時51分発行